

個人

人と人、人とコミュニティを「つなげる」

仙台市

鈴木 悦子 オフィス e

取材日 2013.11.12

宮城県仙台市の地域FM局「ラジオ3」において、番組制作プロデューサーやパーソナリティーを務める。人と人、人とコミュニティなどをつなげる事をコンセプトとして、さまざまな分野の「人」にスポットを当てた情報発信を行なっている。東日本大震災後、対話を通して多くの被災地取材し、発信した。

3月11日 14時46分

3月は毎週木曜日に東京で仕事があり、金曜日は移動日だ。普段であれば新幹線か高速バスで移動している時間帯だったが、たまたま自宅にいて電話で仕事の打ち合わせをしている最中に地震が来た。受話器の向こうのお客様と「揺れているね」と笑いながら話し、最初はいつもの地震と同じ感覚でいたが、揺れが長くなってきたので電話を中断した。すぐに携帯電話とラジオを持って庭に出た。ラジオからは「地震です」と聞こえたが、詳しい事は分からなかった。すごい揺れで、何かの乗り物にでも乗っている感覚だ。身をどこに置けば安全なのかを考えた。隣の家の娘さんも外に出てきた。道路の真ん中が安全だろうと思い、隣の家の子と一緒にじっとしていた。地べたに手をついた状態で、立つ事ができなかった。倒れてくる物がないか心配で周りを見渡すと、家はさほど揺れているようには感じなかったが、電信柱と木がものすごく揺れていた。

たまたま地盤がしっかりした住宅地だったようで、自宅は何の被害もなかった。家具が倒れる事もなく、カウンターや出窓に置いてある物が落ちた程度だ。近所のお宅でも瓦が落ちた様子もない。他の地域はどうなっているのだろうかと思った。宮城県沖地震では建物の倒壊被害が大きかったので、同様にひどい被害なのではないかと危惧した。少し時間が経って、ラジオから「津波が来る可能性があります」と流れてきたが、まったく危機感はなかった。携帯電話のワンセグでも情報収集をしていて、仙台空港に水が入ってきたというニュースを見た。ところがワンセグは画面が小さいので、その様子は膝下ぐらいの水位に見えた。電池が無くなってしまったので、そこで見るのをやめてしまった。

5～6年ほど前、近所のスーパーマーケットが無くなってしまったこともあり、普段から多めに買い物をしていて、缶詰やカップラーメンなどの食料を十分に備蓄している。また、非常時のためにカセットコンロ、石油ストーブ、ペットボトル



の水が備えてあり、浴槽にも水を溜めていた。そして、父が備えを怠らない人だったため、懐中電灯が家の各部屋に用意され、乾電池もきちんとストックされていた。支援が来るまで、最低でも3日は自分でしのげるように備えをすべきだと感じた。また、震災以前に宮城野区のまちづくりをお手伝いした時に「防災の日」の催事の司会をした事がある。毎年「防災の日」に非常時の対応や備えなどを取材して、その様子を生中継していた。その時の知識が刷り込まれているので、無意識のうちに非常時に対する意識が高まっていたのかもしれない。一度でも聞いておく事は役に立つのだと思った。

カセットコンロを使ってインスタントラーメンを作り、器にラップをして食べるのももったいないと思ったので、鍋からラーメンをすすった。主人と2人で「この年でこんな仲良くラーメン食べると思わなかったね」と話しながら過ごした。

大切な友人との再会と支援活動

地震の次の日、名取市閑上に住む40年来の友人が心配になり、電話をかけた。無事が分かり安堵していると「名取市文化会館に避難している」と言う。3月13日、友人に会いたい一心で避難所の文化会館へ向かった。友人から話を聞くと、地震後に花京院から閑上まで歩いて帰ったが、自宅

まではたどり着くことができず、文化会館に避難したそうだ。12日に見つかった娘さんは自宅の部屋のロフトに登って間一髪で津波から助かったらしい。避難所には家族や大切な人が見つからない方々が溢れていた。しかし、泣き崩れている人はいない。情報があまり無かったので、誰もが状況を受け入れられていないようだった。会話の中で「おばあちゃん見つからないの」「息子夫婦が見つからないのよ」と聞こえてくる会話が、あまりにも淡々としていて驚いた。地震のあとのラジオ放送で津波に関するニュースを聞いたが、これだけの被害とは思ってもよらなかった。避難所でたくさんお話を聞き、大変な事が起きたのだと認識したが、現実を受け止める事はできなかった。友人が背広に中学生のジャージを着て、革靴を履いた20代半ばの男性を連れて来た。「家に使っていないパーカーやスニーカーがないかしら」と言うので、明日持って行くと約束した。たまたま子どものスニーカー、新しい下着、靴下、タオル、セーターなどがあつたので、大きな袋に詰めて次の日も再び自転車で避難所へ向つた。友人から電話で必要な物のリクエストも来た。また、たまたま田舎に知り合いがいて、段ボールいっぱい野菜を届けてくれたので、おひたしや一夜漬けを作つて届けたら、「菓子パンとおむすびの日々だったので、すごく嬉しい」と喜ばれた。そうした、自宅と避難所を行き来する生活が1週間ほど続いた。日本の機動力は素晴らしい。特に企業の対応には本当に驚いた。主人の会社は神戸に本社があるのだが、次の日にはトラック何台かを連れて食料や毛布、紙おむつなどの支援物資を届けてくれた。しかしながら、名取市文化会館に約1週間通い、自分の役目は終わったと感じていた。地震から5日ほど経つと、避難所には段ボールに詰められた古着などが山のように届いた。現地に必要な物は日が経つにつれてどんどん変わり、呼びかけた支援物資を持って余すこともあつた。現地の方は簡単には「〇〇が欲しい」「もう〇〇は必要ない」と主張できないと思うので、そこは第三者のボランティアや地域のリーダーの力が必要だと感じた。これからはそうした部分を社会で構築していく必要があると思う。

ラジオで被災各地の様子を発信

大震災が発生してからのラジオ放送は、すべて震災関連の内容を放送する事になった。2011年3月11日～4月初旬までは、給水や食料を手に入れられる場所など生活に必要な情報を流した。4月からスタートする予定だった新番組は、ほぼ決まっていた放送内容を変更し、音楽やトークの間に被災地の状況やボランティア活動、支援物資の



撮影：2011.4.26 宮城県名取市関上（EPO東北スタッフ撮影）

呼びかけなどを発信した。それぞれの番組のパーソナリティーが雄勝や女川などで支援活動に関わっている方々だったので、支援活動に携わる方をどんどんゲストに迎えた。担当していた5～6本の番組のすべての企画が当初とは変更になったけれど、パーソナリティーが活かされ、スポンサーも納得できる番組を制作しようと切り替えた。スポンサーの許可を得て、3月22日から収録を始め、4月1日から放送を開始した。1年以上に渡り、徹底して被災地関連の内容を放送し、現在でもコーナーとして残している。

また、自衛隊の支援活動について、支援活動の現場と電話でつないで放送した。2003年から県内5局で「自衛隊インビテーション」という特集番組をプロデュースしている。自衛隊宮城地方協力本部の放送する情報番組で、自衛官募集情報やイベントなどの紹介を行なっている。普段は自衛隊宮城地方協力本部広報が原稿を作り、検閲、許可を得てから放送している。しかし、震災時には広報班長と私が原稿を作成し、被災地で支援活動をする自衛官のインタビューなどを通じてスピーディーな情報発信を実施した。また、ラジオ3の放送時間内では週3日、現場と中継をつなぎ、他県からの支援部隊の隊員の方々へインタビューした。どちらから来たか、現在どこでどのような事をしているか、お話ししてもらった。インタビューはいくつか質問事項を用意しただけで、なるべく自衛官の方々の生の声を放送できるようにした。自衛隊がこの放送形態を許可した事は、すごい判断だったと思う。

被災された方々に寄り添うとは

地震から2週間後、多賀城、仙台港、関上の日和山、亘理、山元などの津波被害の大きかった地域を回つた。被災地に入ると、津波が来た時にその

土地で何が起こり、人々はどのような気持ちだったのだろうと思いを巡らす。しかし、いくら被災地を見ても、津波被害に遭った方々のお話を聞いても理解できなかった。テレビなどでさまざまなシミュレーションが放送されているけれど、波の大きさは想像できない。おそらく実際は人の想像をはるかに超えたものなのだろう。

仮設住宅の集会所で取材をした時に、手仕事をしているおばちゃん達の中に、男性が1人いたのでお話を伺った。話を聞くと、震災で娘さんと奥様を亡くされたようだ。彼は「家において娘の写真を見るのが嫌だから、集会所に来て作業すると気が紛れる」と言った。この震災で大切な人を失ってしまった方々の事を考えると本当に心が痛い。気持ちの行き場がないだろうと思う。いつも一緒にご飯を食べている人を突然失う事は、身体の一部をもぎ取られるような苦しみだろう。もしも自分だったら、生きていくための気力をどう持てばいいのだろうか。そうした方々のために何もできない自分がもどかしい。

大切な人達を思い、これまでの思い出を支えにして生きてほしい。この方には何が必要なのだろうか。義援金やボランティアはもちろん必要かもしれないが、生きていくために自分を奮い立たせる精神的な支えを見つけ、作っていくサポートを周りの人がどうできるのかを、皆で考えていかなければならないと感じた。

情報を発信する側の課題

これからのコミュニティFM（災害FM）について考えていきたい。大震災後、多くの災害FMが開局した。ラジオでの情報発信の良い点はたくさんあるが、本開局は非常に資金がかかる事なので真剣に考えなければならない。これまで情報を得るにはテレビが主だった。少しでもラジオを身近にする必要がある。特にコミュニティFMは周波数が弱いので、工夫して使わなければならない。常日頃ラジオを聞いていない人が緊急時にコミュニティFMを聞くのだろうか。

災害発生後の時間経過に伴った情報発信のあり方も考えていかなければならない。直後の混乱期には道路事情もあるが、広報車のようなもので直接情報発信を行なう方が受け手に伝わりやすいかもしれない。また、その時期はコミュニティFMよりも、東北放送などの県内全域を放送対象とするラジオの方が、日頃ラジオを聞かない人も周波数を合わせやすい。コミュニティFMは1週間ほど経過してから、地域の状況や給水場所など細かい情報を発信するのに適しているとも思う。求められている情報をスピーディーに届けるために、ラジオの放送対象の広さによって、緊急時の役割を

考えていかなければならないと思う。

大震災を振り返って

これまで人と人、人とコミュニティなどを「つなげる」事をコンセプトとして掲げ、ラジオの番組制作やパーソナリティーに取り組んできた。どこかの局などには所属せずにフリーランサーだったのは、その方がいろいろな場所や組織に入っていけると思ったからだ。15年ほど前から制作を担当している番組「トーク&トーク」では、NPOで活動するボランティアやスタッフをピックアップして、その方の活動に取り組むきっかけや活動内容などを伺い、「人」にスポットを当てた情報発信を行なってきた。団体の代表はメディアに取り上げられる機会があるが、現場で動く方々が取り上げられる事は少ない。NPOとは一体何なのか完全には理解していないながらも、発信する必要があるとずっと感じていた。

同様に、震災に関連する情報発信も「人」にスポットを当てていきたい。2年半以上が経過し、被災された方々がどのような想いを抱えているのか、小さな声を伝えていきたいと思っている。震災後すぐにお話を伺った方に再び取材をして、変わった事や変わらない事を発信していきたい。現在、宮城県では求人が多いが、短期の仕事が多いようだ。しかし、被災した方々が求めているのは長く働ける職場だ。そうしたミスマッチが起きている事を多くの方に認識してもらいたい。皆で被災した方々が求めるものを長い目で考えなければならないと思う。また、現地で活動するボランティアの方の声も伝えていきたい。ニーズがなくなったから規模を縮小したのではなく、予算が切れてしまったためにやむを得ず縮小している活動も多いようだ。組織の代表の方からお話を伺う事はもちろんだが、現場で動いている方々の小さな声も発信したい。行ってみてお話を聞かないと分からない事が多い。そして、同じボランティアの立場でも、感じ方や想いは全く異なる。そうした光の当たらない部分にスポットを当てていきたいと思っている。

震災を通して、究極の場所で生きる人間の姿を見た。世の中は本当にいろいろな事があって、いろいろな人がいる。「想定」も「まさか」もない。人間ってやっぱり心だなと思う。災害は大きな被害をもたらしたが、一方で幸せは無限大だと感じた。ろうそくや懐中電灯の明かりのもとで缶詰のご飯を食べ、皆が小さな事でも幸せを感じた。人間は裸で生まれ裸で亡くなるのだけれど、地位や名誉やブランド品で自分を飾る必要はなく、自分を飾るものが何も無くなってしまう事は怖い事ではないと分かった。

取材した中で、仕事を辞めて仙台にボランティアに来た20代後半の若い方にお話を伺った。その方のお話を聞いていたら、自分の仕事も何もかも投げ打って、被災地で一体自分に何ができるのかと、真摯に向き合っていてすごいと思う。同時に、これから若い人達に向き合い、背負っていかねばならない「3.11」はとても大きく重いものだと感じた。津波を経験した子ども達も「怖い」という感情だけではなく、何か抱えるものがあるのではないだろうか。子ども達、若者達を大人が良い方向に先導してあげなければならないと思う。

自分のこれまでを考えると、たくさんの疑問と混乱の中で生きていたようだ。振り返りもせずに、無我夢中で走ってきた。震災の事が理解できない自分がある一方で、街中での祭りや日々の楽しさを満喫している自分がある。もしかしたらこう

した現実を見て、被災した方々は心では置き去りにされているように感じているかもしれない。温度差が生まれてくる事が心配だ。さまざまな立場の人が震災とどう向き合っていかなければならないのか。もう少し時間が経てば、また新たな課題が出てくると思う。この震災の経験を後世にどう残したらよいか、私のように大きな被害もなく、大きな地震だったとしか感じなかった人にこの現状をどう伝えたらよいか。自分にできる事は、1人でも多くの人の声を発信していく事だと確信している。私はその方々の想いを代弁する事はできない。だから、お許しをいただける限り、いろいろな体験をした方々の小さな声、想い、考え、生き様を多くの人に届けていきたい。「あ、鈴木さんにお話し聞いてもらったなあ」と少しでも取材を受けてくださった皆さんの心に残ればよいと思っている。



撮影：2011.3.13 避難所の仙台市立東仙台中学校で給水を求めて並ぶ人々…6時間待ち（相蘇裕之さん提供）



撮影：2011.3.17 温かいお湯でシャンプーサービス1,000円（足立千佳子さん提供）



撮影：2011.3.12 宮城県名取市 関上店（みやぎ生活協同組合提供）



撮影：2011.3.14 宮城県仙台市 富沢店の店頭販売（みやぎ生活協同組合提供）